因果の必然性

——ヒュームの因果論——

野田　修

一

因果関係にある二つの事象は必然的に結合している、とか、原因には結果を生ずる必然性がある、とか言うとき、われわれは一体いかなることを意味しており、いかなる事態に言及しているのか。これはヒュームのおこなった因果性の分析のうちで重要な位置を占める問題である。以下の小論において私は、いわゆる因果の必然性（causal necessity）なるものが何を意味しており、また、どこに見い出されるか、ということにかんしてヒュームの因果論をもとにして若干の問題を検討したいと考えている。

われわれが因果的必然性について語るとき、その語り方、あるいは「必然性」なる言葉の意味、には次の二つがある。(1)原因は結果にある種のそれ自身に内在する「力」を及ぼして結果を強制する。(2)結果は原因から論理的に導かれる。この二つの必然性、いわば物理的必然性と論理的必然性とはわれわれが普通常識としてもっている因果性の概念にこびりついているばかりではなく、一部の論者によって因果性の本質をなすものとして積極的に主張されてもいる。例えば(1)にかんして、因果性の概念に「力」、「効力」、「産出力」等の概念を保持しようとして、これらの概念を因果性の概念から追放することに根強い反感を示す哲学者がいる。そのうちの一人である M. Bunge は、ヒュームの

下した因果性の定義は「関係をあらわしてはいるが結合をあらわしてはいない」と述べている。[1] Bunge によればヒュームの定式化したものは「出来事の不変の対応関係」[2]しか伝えておらず、原因が結果を産み出す（produce）という因果性の「発生的」[3]性格を伝えていない。一言で言えばヒュームの因果性では「弱すぎる」[4]のである。他方(2)にかんして、因果の関係を論理的関係として把握する傾向も残っている。一つの事象を「説明」するということはその事象の「原因」を指摘することである、とみなされているからである。例えば A. C. Ewing は次のように言う、「原因は結果を説明するとみなされる。原因と結果とのあいだには、原因は結果に対する理由の少なくとも一部分である、というごとき論理的結びつき（logical connection）、あるいは準論理的結びつき（quasi-logical connection）がある、とわれわれは通常仮定している。」[5] そして Ewing は、因果関係が論理的結びつきに似ていることの一つの根拠として、「われわれは原因から結果へと議論することができる」[6]という事情をあげ、そしてこのことは「ある程度まで、そしてある意味において原因が結果を論理的に含むことを暗にさしている」[7]と彼は理解するのである。

「因果問題」（causal problems）と称される問題に対するヒュームの貢献はまさしく右の Bunge や Ewing の考えの批判であった。ヒュームは、因果性を合理論的に解釈すること、つまり因果関係を「理由」と「帰結」の関係としてとらえ原因は結果を論理的に導き出す（因果の論理的必然性）、と解釈することを排斥した。彼はまた、因果性の概念から「力」の概念を追放して、因果性を経験的に観察できる素材をもとにして事象間の「恒常的相伴」（constant conjunction）という、まさしく Bunge の言う「関係」として定式化した。これは普通 “regularity view of causation” あるいは “uniformity view of causation” と呼ばれており、ヒュームの提出したそのままの形ではなくとも若干姿を変えて今日多くの実証主義的傾向の哲学者によって支持されている。

このようにしてヒュームにあっては物理的必然性も論理的必然性もともに否定されてしまい因果の必然性なるものは宙に浮いてしまうようになるのであるが、にもかかわらず彼は因果の必然性にある意味を認めていた。問題はそれ

をどう解釈したらよいのか、ということである。

『人性論』(*A Treatise of Human Nature*) 第一巻第三部における知識論についての長い詳細な議論のすえにヒュームが与えている「原因」の定義は次のようである。「原因」とは「他の対象に先行しかつ近接した対象であり、その場合後者に類似する対象は全て前者に類似する対象と先行及び近接の似た関係にある。[8]」([A cause is] an object precedent and contiguous to another, and where all the objects resembling the former are placed in like relations of precedency and contiguity to those objects that resemble the latter.) つまりaがbの原因である、ということは、(1)aはbに時間的に先行している、(2)aはbに時間的、空間的に接近している、(3)aに類似している対象はどれもbに類似している一つの対象と(1)、(2)の関係にある、ということである。この(3)がいわゆる恒常的相伴(constant conjunction)なる関係であって、これは(1)と(2)の関係の恒常性をさしている。因果性を規定するものはヒュームによると恒常的相伴である。上の定義によって、「aはbの原因である」、あるいは「aはbをひきおこす(cause)」という形の文章はそこから「原因」、「ひきおこす」という語句を除いた、それと等値な文章に書き換えることができ、また、われわれが「aはbの原因である」、あるいは「aはbをひきおこす」と主張するときには、われわれは暗に(3)に示される規則性——因果法則——に言及していることになる。

ところでやっかいなことにヒュームはもう一つ別の「原因」の定義を与えている。つまり「原因」とは「他の対象に先行しかつ近接している対象であり、そして前者と結びついて(united)、一方の観念が他方の観念を形づくるよう、一方の印象が他方のより生き生きとした観念を形づくるように、心を決定する(determine)ものである[9]」([A cause is] an object precedent and contiguous to another, and so united with it that the idea of the one determines the mind to form the idea of the other, and the impression of the one to form a more lively idea of the other.) もっとも、これは前の定義とは別の定義である、と言っては誤解を招きやすい。ヒュームによると、二つの

定義がことなるのは因果性という「同一の対象をことなる角度からながめる」[10]ことによってである。因果の関係を「二つの観念」の比較としての哲学的関係（philosophical relation）とみるか、あるいは「観念間の連合」としての自然的関係（natural relation）とみるか、のちがいによって二つの定義はことなるだけであるとされる。[11] ところで自然的関係なるものは、ヒュームの知識論において「確実な知識」（knowledge and certainty）と対照される「蓋然的知識」（probability）、つまり「信念」（belief）の形成過程を彼が説明するさいに大きな威力を発揮するものであって、さらに自然的関係としての因果性の定義はわれわれの当面の課題に大いに関係があるのである。ヒュームの結論を先取りするならば、因果の必然性とは第二の定義で言われた心の「決定」[12]（determination）であるとされる。しかしこのことが何を意味するかを知るためにはヒュームの議論をもう少し検討することが必要である。

（1）Mario Bunge, *Causality*, p. 44.
（2）M. Bunge, ibid., p 44.
（3）M. Bunge, ibid., p. 44.
（4）M. Bunge, ibid., p. 44.
（5）A. C. Ewing, A Defence of Causality, *Proceedings of the Aristotelian Society*, 1932—3, p. 120.
（6）A. C. Ewing, ibid., p. 121.
（7）A. C. Ewing, ibid., p. 121.
（8）Hume, I, III, sec. 14. ヒュームからの引用は全て『人性論』からである。I, III, sec. 14 とは『人性論』第一巻第三部第十四章を示す。
（9）Hume, ibid.
（10）Hume, ibid.
（11）Hume, ibid.
（12）Hume, ibid.

二

ヒュームはわれわれ人間のもつことのできる知識を、知識の妥当性及び知識を獲得するやり方のちがいに応じて「確実な知識」(knowledge) と「蓋然的知識」(probability) とに分けている。因果性、つまり原因と結果との関係は、他の二つの関係、同一性及び時空関係、とならんで蓋然的知識を構成するものである。[1] この三つの関係のうち、因果性はわれわれが現在経験している出来事を過去や未来のそれに結びつけることを可能にする唯一の関係である、という点で、他の二つの関係にはみられない特異な性質をもっている。因果性のためにわれわれは自分の経験的知識を拡大できるわけである。ヒュームが因果性の本性を詳細に分析するきっかけをなすものは因果性のこの独特の性質である。[2]

ヒュームによると「ひとつの観念を完全に理解する」[3] ためには、その観念がいかなる知覚経験（ヒュームの言葉で言うと「印象」）に由来するのか、ということを調べなければならない。いわゆる「生得観念」(innate ideas) を否定する彼の基本的立場は「われわれの有する全ての観念は直接あるいは間接にそれに対応する印象から出てくる」[4] という、彼の哲学の第一原理をあらわしている命題のうちに表明されている。観念の起源たる印象をさがして観念が「出生証明書」つきのものであるかどうかを吟味することが彼の哲学的分析の方法である。

因果性の観念の出所である「印象」を求めるために、そのあいだに因果関係が成立していると言われる二つの対象をヒュームはくまなく調査するわけであるが、せいぜい分ることは、原因と結果と呼ばれる二つの対象のうち前者が後者に時空的に「近接」しており、前者が後者に時間上「先行」する、あるいは後者が前者に「継起」する、ということだけである。[5] しかし、二つの対象のあいだに「近接」と「継起」の二つの関係が見い出されるとしても、それらの対象のあいだに因果関係が成立するとはかぎらない。いわば偶然によって二つの対象のあいだに「近接」と「継

起」の関係が成立することがあるからである。従って、「近接」と「継起」の二つの関係だけでは「因果性」の観念を構成するのに充分ではない。因果の関係にある二つの対象は必然的に結合していなければならない。ヒュームによるとこの因果の「必然的結合」(necessary connection) の観念こそ、「近接」と「継起」とならんで因果性の十全な観念を形づくるものであって、しかも「近接」や「継起」よりもはるかに大切である。(6)

ところで、この「必然的結合」という観念の出所たる「印象」を探しもとめても、ヒュームはさしあたりそれをどこにも見つけることができない。このことは、ヒュームの立場よりすれば、対応する「印象」のない「観念」をわれわれがもっていることを意味するものであり、「観念は全てなんらかの印象に由来する」という彼の哲学の根本原理に矛盾することになる。ここに重大な難点が生ずることになった。(7)

「必然的結合」の印象を見つけ出すことができなかったヒュームはたくみな処理を用意していた。彼はこの印象を直接探すのをやめて、いわば「まわり道」をすることによって、間接的に探そうとするわけである。有名な因果律批判が生ずるのはこのような文脈においてである。彼は二つの問題を提出し、それらを吟味することによって目下の困難な事態を切り抜けようとする。第一の問題は因果律（あるいはむしろ因果的決定論）の身分を問うことであり、(8) 第二の問題は特定の因果結合を分析して、それにもとづく因果推論の妥当性を吟味することである。(9) このことを通じて因果の必然的結合が論理的な意味でのそれではないことが示される。

これら二つの問題を吟味するさいにヒュームが提出している批判的な議論の根底にあるのは、ことなる (different or distinct) ものは分離できる (separable)、という考えである。この考えは因果性についての議論において採用されているばかりでなく、いわゆる抽象観念あるいは一般観念への批判においても、また時間と空間にかんする議論においても有効な武器として使用されている。抽象観念をめぐる議論においては、例えば、長さや質の特定の規定をもたない「線一般」の観念を心がつくることは不可能である、ということを証明するために、彼は、「いかなる対象であ

れ、ことなるものは区別でき、また、いかなる対象であれ、区別できるものは思考や想像によって分離できる」[10]（つまり対象どうしがことなれば、それらの観念を分離することができる）と指摘したのち、この逆のこと、つまり「いかなる対象であれ、分離できるものは区別することもでき、また、いかなる対象であれ、区別できるものはことなってもいる」[11]ことが成立することを論拠にして次のように論じている、「一見して明らかなことであるが、ある線の精確な長さは線そのものとことなっておらず、また線そのものから区別できない。同じく〔線が〕いかなる質をもつにせよ、その質の精確な度合いは質そのものとことならず、また質そのものから区別できない。従って、かかる二つの観念には、区別や相違の余地がないのと同様に、分離の余地もない。とすると、それら二つの観念は、心が想う（conceive）ときには、互いにつながっている（conjoined）。」[12]つまり、対象どうしがことなっていなければ、それらの観念は分離できない。ところで、ヒュームは「ことなる」（different）という語を観念にも直接およぼして「ことなる観念は全て分離できる」[13]とも言っているにもかかわらず、ヒュームは、そのことから「もし形態（figure）と物体（body）とがことなっていれば、両者の観念は区別できるとともに分離できるはずである」[14]ということが出てくる、と言って「ことなる」という語を観念にではなく、対象にあてはめなおしている。しかしながら「ことなる」という語が対象に適用されるべきか、あるいはそれとも観念に適用されるべきか、という問いは、抽象観念についてのヒュームの議論に関するかぎりあまり意味がないと思われる。なぜならば、観念が対象（ヒュームの用語で言えば、印象）の写し、再現である、という、彼の議論の前提は抽象観念についての議論においてもっともよく生かされているからである。

時間と空間とについて論じているところでは、ヒュームは、例えば、時間の観念は「変化しうる対象の継起」から生ずるが、時間の観念を生み出すもとの印象は、その「継起」の印象とは別のものではない、ということを証明するために、「ことなる」↓↑「区別できる」↓↑「分離できる」という抽象観念についての議論において展開した論法をそっくり採用している。[15]わずかなちがいは、「対象」（objects）という語が「あらゆるもの」（everything）という語にか

わっていることである。次にこの論法が因果批判にどのように適用されているのかを見てみることにする。

(1) Hume, I, III, sec. 1.
(2) Hume, I, III, sec. 2.
(3) Hume, ibid.
(4) Hume, I, I, sec.1.
(5) Hume, I, III, sec. 2.
(6) Hume, ibid.
(7) Hume, ibid.
(8) Hume, I, III, sec. 3.
(9) Hume, I, III, sec. 6.
(10) Hume, I, I, sec. 7.
(11) Hume, ibid.
(12) Hume, ibid.
(13) Hume, ibid.
(14) Hume, ibid.
(15) Hume, I, II, sec. 3.

三

ヒュームはいわゆる因果律を次のようなかたちで提出している。「存在しはじめるものは、全て存在の原因をもたねばならない。[1]」(Whatever begins to exist, must have a cause of existence) このうちにあらわれている「ねばならない」(must) が論理的必然性をさししめしてはいない、ということを示すことがヒュームのねらいであった。つ

まり、「存在しはじめるものは全て存在の原因をもつ」という命題のうちには論理的必然性はないことを証明することであった。

ヒュームは、「原因がなくとも、あるものは存在しはじめる」ことが論理的に可能であることを示したいのである。彼の議論はつぎのとおりである。(2)

(1)ことなる観念（distinct ideas）は全て相互に分離できる

(2)原因の観念と結果の観念とは明らかにことなっている

(3)一つの対象に原因という別の観念をむすびつけなくとも、その対象が、この瞬間には存在しないがつぎの瞬間には存在する、ということをわれわれは容易に想う（conceive）ことができる。従って

(4)原因の観念を存在のはじまりの観念から分離することは、想像（imagination）にとって明らかに可能である。従って

(5)これらの対象を現実に分離することも可能であり、それには矛盾や背理は含まれてはいない。かくて

(6)〔現実の分離は〕単なる観念にもとづくいかなる推論によっても論駁されない。従って

(7)因果律を論証することはできない。

このヒュームの議論において、(2)は明らかにまちがいである、なぜならば、ヒュームの議論は因果律批判の文脈において展開されているのであって、(2)は、(2′)原因の観念と存在のはじまりの観念とは明らかにことなっている、と書き換えられるべきである。

ところで(2′)はいかなることを意味しているのか。すでに述べたように、ヒュームの目的は、「原因がなくとも、あるものは存在しはじめる」ことが論理的に可能であることを示すことである。そのための論拠として、彼は(4)において、原因の観念と存在のはじまりの観念とが想像においてたやすく分離できることをあげている。この両者の観念の

分離可能性は、(3)において、原因がなくとも、あるものが存在しはじめるという事態を想うことができる（conceivability）ことのうちにある。ところで、原因の観念と存在のはじまりの観念とが、相互に論理的に独立である、という意味において「ことなって」いるのであれば、つまり、前者と後者との間には相互に論理的含意の関係はない、という意味においてことなっているのであれば、われわれは、原因がなくとも、あるものが存在しはじめる、という事態を想うことができ、従って、「原因がなくとも、あるものは存在しはじめる」ことは論理的に可能である。ヒュームの言う「ことなる観念」とは、このように、論理的に相互に独立な観念、と解すべきである。かくて、因果律を「単なる観念にもとづく推論」つまり、観念と観念とのあいだの論理的結びつきをたどる推論（論証的推論）によって証明することはできない。言い換えると、因果律を表現する命題は論理的に必然的な命題ではない。

次にヒュームが考察するのは、特定の因果結合の分析、並びにそれにもとづく推論の妥当性である。そこにおいて、ヒュームの因果論における最大の論点が示されている、と私には思われる。因果性の分析は因果推論の分析を背景としてなされる。(3)

ヒュームの仕事は次の三つである。(1)特定の因果結合の必然性が何によるかを究明すること、(2)特定の因果結合にもとづく推論の分析（この途中で「近接」と「継起」以外の因果性を構成する第三の関係「恒常的相伴」（constant conjunction）が見い出される）、(3)因果推論に置く「信念」の解明。ここではこの(1)、(2)、(3)を全部検討する余裕はないので、若干のめぼしい論点をとりあげて箇条書きにしてみよう。

(A)特定の因果関係の必然性は論理的必然性ではない。このことを示すためにヒュームは因果律批判の議論のうちで用いた「ことなる観念」の論法を用いている。特定の原因と特定の結果との結びつきは、一方の観念が他方の観念を論理的に導き出す、又は後者が前者に論理的に依存している、という関係を表わしているのではない。「原因と結果と呼ばれる対象を、それ自体考察するだけで、それらの対象についてつくられる観念以外のものを見な

いとすれば、他の対象の存在を含むような対象はない。[4]」

(B)従って、特定の因果関係にもとづく推論は、原因又は結果と呼ばれる事物の必然的な依存関係によってなされるのではない。

(C)因果推論とは、われわれが二種類の対象のあいだに恒常的相伴を経験し、一方の対象が出現すると他方の対象の出現を期待する、一方の「印象」があらわれると、他方の「観念」を「勢い」と「生気」をもって想い浮かべる、ということである。[5]

(D)因果推論は帰納推理であるが、自然の一様性の原理は論証されないので、因果推論は論理的に正当化されえない。発生的に、つまり因果的に説明されるだけである。[6]

(E)因果推論を正当化するために、あるいは恒常的相伴に「原因」を帰すために、原因には結果を産み出す「力」なるものがあると仮定しても、われわれは「力」を経験することはできない。一つの対象が、かって他の対象を産み出す「力」をもっていたとしても、その力が同種の対象に常にあり続ける、という保証はどこにもない。

(F)最終策として「力」及びこれと同意の「効力」、「産出力」等を論理的必然性と同じものとみなす大胆な試みは成功しない。

ここに問題がある。ヒュームは「力」の一般観念を得るためには、まずわれわれはその特殊な、具体的観念をもたねばならず、そのためには、ある特定の結果を必然的に生ずるように作用する「まことの力」を具えた対象に目を向けなければならない、と述べた後で、次のように言っている。「われわれは、原因と結果とのあいだの結合をはっきりとくわしく想わなければならず、両者の一方を単にながめるだけで、他方がそれに従い(follow)、先行(precede)しなければならない、と宣言できなければならない。……人間の心は、両者のあいだに、なんらかの結合を想わせる二つの対象の観念をつくることはできない、つまり両者を結ばせる(unite)ところの力(power)又は効力(efficacy)

をはっきりと理解させるような二つの対象の観念をつくることはできない。……そのような結合は一つの対象が他の対象に従わない（not follow）ことの、あるいは従わないと想うことの絶対的不可能性を含む。[7]」「力」を論理的必然性と解釈する立場に立つと、原因と結果との結合は論理的な関係であり、従って右の引用文中の「従う」（follow）、「先行する」（precede）はあくまでも「理由」と「帰結」との論理的関係とみなければならない。ただこの引用文においてはそれが否定されている。つまり因果の観念は「ことなる」観念であるとされている。にもかかわらず、「従う」、「先行」ということが原因と結果の二つの出来事の時間的順序をあらわしているものと考えると、「ことなる観念」とは別の、原因と結果とのあいだには時間のずれがある、という意味での「ことなる出来事」が成立するのではないか。「ことなる観念」と「ことなる出来事」とがどのように関係するかはまだ分らないので、問題として出しておくにとどめる。

(G)「因果の必然的結合」の観念は因果推論のさいに心が感ずる「決定」（determination）である。二種類の対象の恒常的相伴を経験すると、一方の対象が（印象として）出現すると他方の対象の観念を想い浮かべざるをえない。この「決定」は習慣の産物である。つまり恒常的相伴が観念連合を生むさいの産物である。

(H)ヒュームにあって因果の必然性とは恒常的相伴と因果推論における心の「決定」をいっしょにした事態を意味する。[8]「出来事どうしが必然的に結合している」という言い方は、ヒュームによると、心の「決定」を外界へ投影する結果生まれる。[9]次にヒュームにおける因果の必然性をいかに解釈するかを検討してみる。

(1) Hume, I, III, sec. 3.
(2) Hume, ibid.
(3) Hume, I, III, sec. 6.
(4) Hume, ibid.
(5) Hume, I, III, sec. 7.

(6) Hume, I, III, sec. 6.
(7) Hume, I, III, sec. 14.
(8) Hume, ibid.
(9) Hume, ibid.

四

これまでわれわれは、ヒュームにとって因果の必然性とはどのようなことを意味していたのか、を彼の議論にそって検討してきたわけであるが、「印象——観念」という枠組を立てることによって観念の本性を印象の次元にまで還元して探る、という彼の哲学的分析のうちにみられる発生主義的背景を洗い落として彼の議論を再検討するならば、どのような結果が出てくるであろうか。

ことなるものは分離できる、という原子論的立場をもとにして展開された鋭い批判的議論を除けば、因果性の本性を究明するにさいしてヒュームがまず問題としたことは、われわれはいかにして因果の観念を得るようになるのか、ということであった。いかなる生得観念をも否定するヒュームの徹底した経験論の立場よりすれば、観念の本性を究明することはその起源を探ることに通ずる。因果観念がそこから由来するところの、なんらかの「印象」——経験の直接与件——を求めることが彼の課題であり、そしてこの課題を遂行することによって彼は「原因」とか「因果性」とかの言葉に意味を与えることができ、かつまた、われわれが日常生活において不断に行っているいわゆる因果推論(causal reasoning) にそれ自身因果的とでも言える発生的説明を与えることによって、その推論をある意味で正当化することができたのである。

にもかかわらずヒュームのやり方には若干の難点がある。因果の観念が生まれるためには、二つの事物のあいだに

近接と継起の関係が見い出される事例を一つ経験するだけでは不充分である。また、この二つの関係は見い出されるが種類のことなる事例（ヒュームのあげている例で言えば、炎と熱、二つの物体の衝突、雪と冷、など）をそれぞれ一つずつ経験することでも不充分である。少なくとも同一種類の事例を何度か経験しなければならない。ところで、何回以上経験すれば因果の観念は得られるのか。この種の問いに対してはヒュームの説明では充分に答えることができない。さらに、ヒュームにあっては、われわれがそもそも最初に特定の因果観念を獲得する過程においては、記憶の果たす役割は不可欠である。実際彼は「もしわれわれに記憶がなかったならば、われわれは因果性のいかなる観念をももたなかったであろう」と明言しているほどである。ところで、過去の恒常的相伴の事例を思い出すことがあるにしても、記憶または想起にかんしては、それの真実性は何によって保証されるのか、というやっかいな問題が生じてくる。結局ヒュームにあっては、記憶の認識論上の機能は観念の「勢い」(force) と「生気」(vivacity) とにあり、これが記憶の真実性を保証するものとなる。これはソリプシズムへの傾斜をもっている。

上記の難点や、その他ヒュームの発生主義では処理されにくい問題を避けるために私は因果の必然性を、ヒュームの議論を参考にしつつ新たな角度からながめてみたい。それは因果的必然性の源を、ある命題（群）が仮定として前提されると、そこから他の命題が導き出されうる、という命題間の純粋に論理的な関係に求めることである。

因果的必然性を因果法則の必然性のうちに求める考えがある。そのさい、注意しなければならないことであるが、因果法則そのものに論理的必然性があるとみなすことはまちがいである。このことをヒュームははっきりと見抜いていた。[1] 例えば、「静止している一物体に他の運動している物体が衝突するならば、静止していた物体は動き出す」という形の因果法則には論理的必然性はない。なぜならば、この命題を構成する「物体」、「衝突」、「運動」の観念だけに注目するかぎりにおいては、この命題が成り立つか、成り立たないかは分らないからである。そして、もしこの命題が論理的に必然的であるとすれば、この命題で表わされている運動の伝達以外の事態を述べる他の命題は全て「形式

的な矛盾」を含むことになるはずであるが、実はそれらの命題は論理的に可能である。なぜならばヒュームによると、われわれは運動の伝達以外の全ての事態について「明晰で整合的な観念」[2] (a clear and consistent idea) をもつことができるからである。「運動している一つの物体は静止している他の物体に接触するや停止する」という仮定も、「運動している一つの物体は静止している他の物体に接触するや、もときた方向にひきかえす」という仮定も、あるいは、日常の経験からすれば奇妙なことではあるが、「運動している一つの物体は、静止している他の物体に接触するやいなや消滅する」という仮定も、全て「整合的で自然」[3]である。従って、われわれはこれらの仮定を経験をはなれては排除できない。われわれが運動の伝達をより「整合的で自然」であるとみなすのは、われわれが住んでいる世界においては、二つの物体が衝突したときには運動の伝達以外のことは経験されないからにほかならない。かくて因果法則そのものには論理的必然性はないことになる。

因果法則を含む一群の命題が仮定されるとそこから一つの命題が論理的に導き出されるならば、後者は前者に対して必然的な関係にある。このように、命題と命題との論理的関係としての必然性に因果的必然性の源泉を求めることがヒュームの場合においてはどの程度までに成功するかを検討してみよう。

すでにみたように、ヒュームにあっては、因果推論は、二つの事物が恒常的相伴の関係にあるのを経験すると、われわれは一方の事物が生ずるのを経験すると他方の事物の出現を期待する、ということであった。ヒュームの言葉で言えば一方の「印象」が心をして「観念」を生気ある姿で想い浮かばせるよう「決定する」のである。しかしこの決定は理性の命ずるところではない。なぜならば期待が期待はずれに終わる余地は残されているからである。つまり、「決定」になんらかの理由があるとすれば、それはこれまで経験された恒常的相伴の関係が将来においても同様に持続するはずである、ということを暗に前提としているのであって、この「自然の一様性」の原理はア・プリオリには証明されないからである。その「決定」とは、二つの事物の恒常的相伴と一方の事物の新たな出現とを経験したわれ

われがそのような場に置かれたとき体験する「心理（学）的不可避性」以外の何ものでもなく、これはヒュームが探し求めていた「必然的結合」の観念を生み出す「印象」であったのである。

かかる心理（学）的不可避性に言及することなしに因果の必然性の源を見い出すことはいかにして可能であるか。まず、これまで経験された二つの事物の恒常的相伴を示す命題に、いわゆる「自然の一様性」(uniformity of nature)をつけ加えたものを特殊の因果法則(particular causal law)とみなすと、勿論、この因果法則を表現する命題には論理的必然性はない。なぜならば、この場合因果法則とは、今までに経験された恒常的相伴の関係が将来においても成立することを仮定しているにすぎないのであって、この仮定を表現する命題に論理的必然性が欠けていることは、さきほどみた二つの物体の衝突のことをみれば、自明である。つまり因果法則は一つの仮説にすぎない。

次に、因果法則を示す命題のうちにあらわされている恒常的相伴の関係の一方の項に属する事象を記述する命題、またはその事象の出現を報告する命題（A）と、他方の項に属する事象を記述する命題、またはその事象の出現を報告する命題（B）とを定式化する。もし二つの命題（A）と（B）とが定式化されるとすれば、因果法則を示す命題と命題（A）とを合わせたものから、命題（B）は論理的に導き出されるはずである（なぜならば、自然の一様性の原理が前提されるかぎりにおいて、因果推論は論理的に正当化され、この原理はわれわれの因果法則のうちにすでに組みこまれているから）。事象aと事象bとのあいだの因果関係の必然性は、因果法則を示す命題と事象aを記述する事実命題（A）とから事象bを記述する事実命題（B）が導き出されることの論理的必然性を意味する。つまり事象bを記述する命題は、因果法則を表わす命題と事象aを記述する命題とに対して論理的に必然的な関係にあり、この論理的に必然的な関係が、事象aと事象bとの因果的必然性の意味するところとなる。

勿論、導き出された命題（B）を単純にみた場合、それが常に真となる保証はどこにも残されてはいない。このことは、ヒュームが因果の推論は蓋然的推論(probable reasoning)であって、その推論によってえられる知識は蓋然

性（probability）の域を出ない、と言っていることからも、明らかである。

因果的必然性の源を上記のように命題間の論理的結びつきに求めると、若干の問題が生ずる。

第一に、ヒュームにおいては、二つの事象が因果関係にあるとき一方の事象（原因）は他方の事象（結果）に時間上先行するのであるが、因果的必然性の新しい解釈のもとでは、この時間関係は消滅してしまっている。つまり、因果性とは、命題と命題とのあいだの、論理的な、時間にかかわりのない（timeless）な関係として解釈されているからである。この点をどう処置するか、次のようにすればよい。因果法則そのものを、原因と結果との時間関係がそのうちに表現されるように定式化すればよい。即ち、「任意の時刻t_1においてひとつの事象が生ずれば、その後の時刻t_2（$t_2 > t_1$）において常に他の、一定事象が生ずる」、という具合に定式化する。そして、そこに表明されている恒常的相伴の関係の一方の項にあたる事象が出現するならば、その事象を記述する命題、ないしはその事象の出現を報告する命題を、そこにその事象が出現する時刻がはっきり明示されるように定式化すればよい。

第二に、そもそもヒュームにあっては、因果性とは、二種類の事象のあいだの関係であって、命題と命題との関係ではないのであるが、われわれの解釈のもとにあっては、あたかも命題と命題との関係になってしまったようにみえる。しかしそうではない。因果性は命題間の関係を通じて間接的に事象に及んでいる。このことはわれわれの解釈の支払った代償である。

ヒュームは仮説を立てることを嫌ったが、因果の必然性についてのわれわれの解釈に好意を寄せてもらうことを期待して、ひとまずこの拙ない小論を終わることにする。

（1） Hume, I, III, sec. 9.

（2） Hume, ibid.

（3） Hume, ibid.

（了）

（筆者　北九州大学外国学部講師）

お詫び

本号論文として安井邦夫氏の「フィヒテとヘーゲルにおける「矛盾的構造」」を前号に予告致しましたが、編集上の都合で石井誠士氏の「宗教的死と愛(二)」に代えました。御迷惑をおかけ致しますが御諒承下さいますようお願い致します。

編集代表　木　曾　好　能

comportement, ou en terminologie de Merleau-Ponty, comme schéma corporel. Et mon corps et le corps d'autrui s'entrelacent et se confondent en tant que schéma corporel pour être inséparables. D'autre part, il suppose le cogito tacite qui parle, pour ainsi dire, le cogito cartésien. Il élargit le cogito pour y comprendre le schéma corporel. Aussi pouvons-nous avoir l'existence d'autrui en cogito tacite.

Causal necessity

——Hume's Theory of Causation——

by Osamu Noda

We usually refer to causal necessity in two different manners. First, we say that effect is necessitated in a physical way, i. e., effect is forcibly produced by virtue of "efficacy" or "power" inherent in cause. Secondly, we say that effect is necessitated in a logical way, i. e., effect is logically derivable from cause. The first kind of necessity is physical necessity, and the second kind a logical one.

David Hume made a great contribution to the study of the problem of causation. Hume's arguments as to the nature of causation are divided into two parts, negative or critical and positive. It is well known how in his negative or critical arguments Hume rejected both kinds of necessity. He shows that the connection of cause and effect is not logically necessary. He also shows that we can never perceive any causal efficacy. But, at the same time, in his positive arguments he says that causal necessity lies in the psychological inevitability which our minds experience when we make causal reasonings. According to Hume, when we have experienced a constant conjunction of two sorts of objects, we call the one sort of objects causes and the other effects. And when one object occurs new which belongs to the one sort of the constantly conjoined objects, we can never fail to expect the occurrence of the other object which belongs to the other sort of them.

In Humean phrases, one object "determines the mind to conceive the idea of other object." This "determination of the mind," he says, is the product of the association between the ideas of the two objects which stand in the relation of constant conjunction, and moreover, surprisingly, the source of the idea of causal necessity, "the idea of necessary connection of cause and effect", which is rejected in his critical arguments.

In other words, causal reasonings consist of our continuing to believe that the constant conjunction which we have experienced in the past will be found also in the future, i. e., our continuing to rely on the principle of uniformity of nature. If this principle is presupposed, causal reasonings become logically valid, but since that principle itself cannot be demonstrated, our reasonings never ensure the truth of the conclusion, and thus causal reasonings, which are of the same nature as inductive arguments, are not justified. In short, Hume's final conclusion is that constant conjunction constitutes the essence of causation. This is known today as "the regularity or uniformity view of causation."

In view of some intractable difficulties arising from his way of treating with the matter, I should like suggest the following interpretation of Hume's view of causal necessity. First, we formulate a proposition stating a particular causal law, which is analysable into the experienced conjunction of two particular objects and the principle of uniformity of nature. Secondly we formulate a factual proposition(A) reporting the occurrence of one of the objects and a factual proposition (B) reporting the occurrence of the other. Then, the factual proposition (B) is logically nessary to the proposition stating the particular causal law and the factual proposition(A). Thus, from the proposition stating that causal law and the factual proposition(A), we are entitled to derive the factual proposition(B). Causal Necessity, then, means this very derivability which is the logical relation of entailment between propositions.